朝刊・2026年10月01日（木）

滴一滴

大型クルーズ船から外国人客が次々と降りてくる。待機するバスや小型船に乗り換えて岡山、倉敷市の観光地や、アートの島・直島（香川県）に向かっていく。行楽シーズンに玉野市・宇野港で見られる光景だ▼宇高連絡船の廃止以降、減っていく人の流れを取り戻そうと、港に大型客船用岸壁が整備されたのは2006年だった。丸20年となる今年は1万トン前後のクルーズ船が20回訪れる予定で、新型コロナ禍での落ち込みから過去最多（22回＝19年）に迫るペースで回復している▼備讃瀬戸を舞台にした現代アートの祭典・瀬戸内国際芸術祭も人が行き交う港への追い風といえる。もっとも、発着点としての存在感が増すほどに募る思いが地元にはある。玉野は〝単なる通過点〟というジレンマだ▼突破口を開く契機になるだろうか。「滞在したくなるまち・玉野」を合言葉に学ぶ「たまの観光塾」が先月から始まった▼市民や観光関連の団体、行政、企業が集い、ゲスト講師による講義と地元の観光資源を改めて見直すフィールドワークを通じて新たな取り組みを探っていく。これまでに玉野と直島が手を組んでのクルーズ客向け周遊ルートの開発が早速、提案された▼「仲間が増え、一つの方向性が見いだせれば」と主催する就実大（岡山市）の八巻恵子教授。港に新しい風が吹いてほしい。

2026・10・1

©山陽新聞社　無断複製転載を禁じます。